

【受験生特集】—さまざまなキャンパスライフを紹介します

何かが変わる「ゼミ」の魅力

通常の講義とは違う魅力があるゼミナール(ゼミ)。基本のテーマに沿って一人ひとり、時にはチームを組んで研究を進め、討論やプレゼンテーションにより、専門分野の理解を深める。少人数のため、先生との距離も近く、「熱い教え」を身近に受けることができる。ゼミ内だけでなく、学外のコンテストに応募したり、地域の課題解決に協力したり…。ゼミ活動は大学生活の中心を形づくる。このページではそのいくつかを紹介しよう。

経営・石崎ゼミ3学生

他大学生と“議論の毎日”「FUTURE 2007」に参加

首都圏5大学(専修、上智、成蹊、東洋、早稲田)で広告、マーケティングを学ぶ学生による「大学生意識調査プロジェクトFUTURE2007」に、経営学部・石崎徹ゼミの金井建介さん、土屋甫行さん、増井葉子さん(いずれも3年次)の3人が参加。他大学生約30人とともに「日常生活のマナー」に関する大学生の考えを1000人から調査しまとめた。

同プロジェクトは、実践的なマーケティングリサーチを学ぼうとする大学生有志が(社)東京広告協会や博報堂の指導のもと、約8カ月間かけて企画立案、調査設計、実査、集計、分析、発表まで一連の作業を行うもので、今回で13回目となる。

石崎ゼミの3人は昨年参加した先輩などから勧められて「FUTURE」に参加した。

金井さんは「作業中の8カ月間はまさに『議論の毎日』。おかげで人間関係が広がり、以前のように知らない人と話すことへの恥ずかしさがなくなりました」と振り返った。

また最初はサークル活動との両立に苦労したという土屋さんは「両方の夏の合宿が重なり、どっちに参加するか悩んだ末、『FUTURE』の合宿を選びました。引っ込み思案でしたが、グループ作業を通して自分の意見を持つことができるようになりました」と、いつの間にか、サークル活動にとって代わる存在になったと言う。

プロジェクト副代表を務め、11月末の発表会ではプレゼンターの一人として活躍した増井さんは「期間中は毎日のようにメンバーと会ってミーティングをこなし、じつに濃密な8カ月間でした。みんなの意見をまとめるのに時間がかかりましたが、意見の対立も受け止める姿勢を学びました」と話す。



▲プレゼンターを務めた増井さん(右)



▲会場の質問に答える金井さん(左)と土屋さん(右)

【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します

何かが変わる「ゼミ」の魅力

経営・福原ゼミ

企業不祥事をテーマに 日経ビジネス・プレゼン大会出場

経営組織論を専門とする経営学部・福原康司ゼミ3年次の鏡佳奈子さん、山本嶺さん、柘植洋明さんは昨年10月、日本学生経済ゼミナール・第47回関東部会の「日経ビジネス主催プレゼンテーション大会」に応募。予選91チームから13チームが選ばれた中央大学での本大会で「企業不祥事を探る」をテーマに半年間の研究成果を披露した。惜しくも入賞は逃したが、各審査員から「どのチームが優勝してもおかしくない」と講評されるほどレベルの高い大会で、3人は貴重な「何か」を感じ得た。



▲プレゼンを終え、笑顔のメンバーたち。前列左端が福原准教授

同ゼミでは2年次から内定者による自主的な活動がスタートする。「早い時期から信頼関係を築いていた分、それぞれの得意分野や性格を理解し、一つひとつ壁を乗り越えることができた」と振り返る。

「調べては先生からダメだしされるのを繰り返すうちに、自分達の知識の少なさや後を絶たない企業不祥事の闇の深さがどんどん明らかに。研究材料が増えた分、調査は大変でした」とリーダーの鏡さん。ふだんのゼミから「簡潔で魅力的」なプレゼンをたたき込まれている柘植さんは、「とにかくキーワードとビジュアル」にこだわったパワーポイントを作り込んだ。

山本さんは、聞き手の理解を促すため、生徒役と先生役の掛け合い形式を提案し、対話全体のストーリーを練り上げた。報告中、機材のトラブルに見舞われながらも、3人の織りなすハーモニーが、聴衆を引き込んだ。「つらかった練習は、気がつく自信へと変わっていき、300人もの大観衆の前でもあがることはなかった」という。

「結果発表のあと、先生から『よく頑張ったな。だけど君たちは今どんなことを感じてる?』と聞かれたことが心に響きました」と言うのは山本さん。「学内の発表では好評価だったので、表現力には自信があった。でも他大学に比べ、必要な情報を汗かきながら集める努力が劣っていた。それがリアリティーの欠いた報告になってしまった」と、反省点を語る。

「これから『他人とは違う、自分だけのもの』を見つけたい」(鏡さん)、「伝えることの難しさ、伝わった時の喜びを後輩に教えたい」(山本さん)、「時間の大切さを痛感。思ったらすぐに行動に移すようにしたい」(柘植さん)と、他大生とのせつたくま切磋琢磨が、三者三様に目に見えない宝物を授けてくれたようだ。

【受験生特集】—さまざまなキャンパスライフを紹介します

何かが変わる「ゼミ」の魅力

商・神原ゼミ

東京板橋区の商店街“活性化”に協力

街に学び 暮らしを考える

商学部・神原理ゼミではこれまでも積極的に地域の課題解決にかかわってきたが、研究活動の一環として昨年秋から、東京都板橋区立板橋第一中学校（逢見百樹校長）と同区の「21世紀ものづくりフォーラム」が設置した「地域研究室」の依頼により、区内活性化のための地域研究を開始した。

12月19日には第1回発表会「街の魅力を発見しよう」が同中学校で行われ、中学生、区民、区役所関係者など約40人を前に研究成果を発表した＝写真。

4年次の木野田有治さんらが、川崎市多摩区からの依頼で取り組んでいるタウン・セールスについての事例と、板橋区・大山駅周辺商店街のアンケートの分析を紹介。自転車を含む交通マナーの改善が必要と調査結果をまとめた。

神原教授は「板橋区は他の地域よりも少子高齢化が進んでおり、医療・福祉政策の整備が急務。また、中小製造業や商店街の活性化という課題もあり、日本の将来の縮図のような街だ。『街全体』を教科書とすることで、日本の経済社会におけるさまざまな課題を学ぶことができる。初年度は中学生に親しみやすい商店街をテーマとしたが、今後は高齢者の生活支援、子育て支援などのテーマを設定していきたい。ゼミ生たちが、板橋の街を調査しながら、これからの自分たちの暮らしのあり方、大きく言えば将来の日本について、自分たちで考え、自分たちなりに行動できるようになってほしい」と地域連携の狙いを語っている。

中学生との合同フィールドワークも検討

今後は、2月末ごろから活動を再開し、春、夏、秋、冬の各1回程度の活動報告会を行う予定。中学生と大学生の合同フィールドワークも検討しており、新しい連携が生まれそうだ。



【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します

何かが変わる「ゼミ」の魅力

経営・情報系3ゼミ合同卒業研究発表会

植竹朋文ゼミ／魚田勝臣ゼミ／大曾根匡ゼミ

2年間の成果発表 ゼミ間の交流にも

経営学部情報系3ゼミ合同卒業研究発表会(共催＝経営学部ゼミナール連合会)が12月8日、生田キャンパスで開催された。この発表会は、「視点の異なる他の先生方のコメントによる研究視野の拡大」「質疑応答能力の向上」「他ゼミの長所の吸収、自己の再認識」などの成果が得られるとして行われている。

堂々と発表、後輩の目標に

植竹朋文ゼミ・魚田勝臣ゼミ・大曾根匡ゼミの2年次生以上の総勢63人をはじめ、各ゼミの卒業生10人も参加。4年次生17人が各自15分間、2年間の卒業研究の成果を発表した。最後に野村奈々子さんの「好みの香水検索システム」(植竹ゼミ)、町田拓郎さんの「ユーザにとって『安心』な個人認証システムの提案」(魚田ゼミ)、小池宏和さんの「司会機能つき電子会議システムの開発」(大曾根ゼミ)が優秀発表者として選出され、表彰された。4年次生の素晴らしい研究と、その堂々とした発表ぶりに2、3年次生は目標を見つけた様子だった。

大曾根教授は、「高レベルの研究内容で、プレゼンも良く、質問も的確で有意義な発表会となった」と感想を述べ、代表幹事の小泉健太さん(大曾根ゼミ・3年次)は、「時間配分、席次、レジュメの構成や進行など難題ばかりでしたが、皆様のご協力で無事終了でき感謝しております」と語った。



▲植竹ゼミ・野村奈々子さん



▲「睡眠導入システムの開発と入眠条件の模索に関する研究」を発表する魚田ゼミ・等々力理恵さん



▲「複数サーバーモデルのペトリネットに対するシミュレータの開発」を発表する大曾根ゼミ・池田大輔さん